



2月のある日、会館地下の蕎麦屋でのこと。ばったりお会いした本誌編集長から今回の執筆を依頼された。修習期は55期であるから「花水木」の方だろうと早合点した。ところが編集長は「山椿」の方だと言う。登録者数で区分すると55期は既に「山椿」だとのこと。「山椿」ときいて正直怯んだ。自分には語るべき「来し方行く先」も「見識」もありそうにない。しかし断るに断れない。編集長に奢ってもらった蕎麦（よりによって大盛である。）を私が完食したタイミングで話を切り出されたからである。「ご馳走様でした。でもそれとこれとは別です。お話はお受けできません」とはとても言えない。それに、声がかかるといのは大変ありがたいことである。「信頼すべき人からの頼まれごとは断るなかれ」を行動原則としてきたが、総じて言えば間違っていないと思っている。

そうやって頼まれごとを引き受けていると、それが本来の弁護士業務以外の会務、閲務等であっても、ときに興味深いことに出くわす。私にとっては、平成22年7月から平成28年3月まで担当していた弁護士会照会申出の審査がそれである。当時の調査室長からお誘いを頂き、何の関心も

ない分野だったが、上記行動原則に則り調査室囑託に加えて頂いた。右も左も分からないので一から勉強した。途中の2年間、日弁連の照会制度委員会委員にも選任して頂い



河野 浩 (55期)

●Hiroshi Kohno

た。在任中の累計では1万件前後の申出を審査したはずである。東日本大震災が発生した時は会館9階で審査中で、事務局の皆さんと机の下に隠れたのも今では思い出である。

弁護士会照会の書式、記載内容、その他留意事項については、当会の会員専用サービスサイトに最新情報までフォローアップされているのでそちらをご覧くださいのが便宜である。ここでは、申出をする際の一助として頂く趣旨で、審査担当者がどのような考え方で審査に臨んでいるか、簡単

に述べておきたい。

審査担当者は可能な限り申出を通したいと思って審査をしている。審査担当者も本業では立証の労苦を味わっているからである。そのため、照会の要件に照らして微妙な申出については、助け船を出しているつもりである。決して泥船ではないから、素直に乗ってほしい。難しい事案では、申出会員と一緒に考えることもあるので、率直に審査担当者に相談するのがいいと思う。受任事件に対する真摯な姿勢が伝われば審査担当者も意気を感じて何かいい方法はないかと考えたくもなる。審査担当者を上手に活用して頂ければいいと思う。他方で、審査担当者に無意味な論争を挑んだり、非難する申出会員もいるが、それで結論が変わることはないので建設的とは思われない。

以上は、今年3月で審査をお役御免となった私の個人的見解にすぎないことをお断りしておくが、おそらく、現役の審査担当者は同じ思いで審査しているはずである。 ❷

Hanamizuki

花水木

20



坂井 愛 (60期)

●Ai Sakai

今年の9月で弁護士登録をしてから10年目になります。弁護士になった当初から現在まで、恵比寿にある齋藤総合法律事務所に所属し、一般民事、家事、企業法務等様々な分野の案件を扱っております。

もう10年も経つのかというのが率直な感想です。これまでを振り返ってみると、本当にいろいろな事件や人に出会い、悩み、喜び、反省し、の繰り返しだったように思います。

法律相談の際には、未だに、役に立つアドバイスができてきているのか、また相談したいと思ってもらえるような対応をしているのか、常に自問自答しております。弁護士になって間もない時の話ですが、女性から離婚の相談を受けました。入室時、さめざめと泣いていらっやだったので、一生懸命話を聞いて自分にできるだけのアドバイスをしたと思っていましたが、相談の最後に、相談者から、「面白かったです！」と、にっこにこの笑顔で言われてしまいました。相談者の頭に残るアドバイスが何もできていなかったのかしらと反省をしましたが、相談者が前向きに元気になって帰って行ったのだから一先ずよしとしよう

と自分を納得させたこともありました。

受任事件の割合としては、家事事件が多いと思います。私は、家事事件の依頼者、特に自分よりも年上の女性の依頼者から可愛がっていただくことが多く、結婚した際にはお祝いをもらったり、ご自宅での夕食やホームパーティー等に招かれたりします。このような依頼者から、「先生と出会えてよかった。『ご縁』があってよかった。」と言われると嬉しく、何より心が救われます。

先日も、弁護士会の電話相談から面談を実施し、2回面談を行った後に受任に至った依頼者から、「先生があの時電話に出られてよかったです。これも『ご縁』ですね。」と言われ、『ご縁』とは最近よく耳にする言葉だから大切にしなさいという意味なんだなと感じております。

『ご縁』といえば、夫と一緒に行く年1回の海外旅行でも感じます。私は、特段趣味を持っておらず、かつ出不精なので、連休等ある程度まとまったお休みがあるときでも自宅にいるか自宅を出ても自宅近辺を越えて出かけることはありませんでした。このように、休日は若干引きこもりがちであった私が、平成25年に当会の互助会旅行（ニュー

カレドニア）に参加したことをきっかけに、年1回はどうしても海外旅行に行きたいと強く思うようになりました。

ニューカレドニアから帰国後、それまでは海外に縁のなかった夫を口説いて、初めて年末年始をグアムで過ごしました。

その後も、カナダ、フランス等、年に1回は海外旅行に行っているのですが、私も夫もまだまだ海外初心者なのでツアーに参加することにしています。ツアーで出会う、年齢も様々な夫婦や親子の方々と、観光や夕食等を共にすることも『ご縁』であり、次回のツアーではどのような人と出会えるのかとワクワクします。今年の旅行も今から楽しみです。

最後に、10年目というのは1つの区切りだと思いますので、改めて、人との『ご縁』を大切に、感謝の気持ちを忘れず、夫と行く年1回の海外旅行を楽しみにしながら、自分の持ち味を生かして今後も張り切っていきたいと考えております。

N
APA

フェアモント ル シャトー フロントナック(カナダ)